資料No. 4

自閉症と思春期

大分大学教育学部
小林隆児

一、はじめに

日常の臨床場面で家族や学校の先生と接していて感じることですが、自閉症といわれている子ども達に対する最も大きな誤解の一つは、言葉の発達の遅れと同じ尺度で彼らの精神発達を評価してしまいがちだということです。実際は彼らも他の子ども達と同じように加齢と共に情緒面でその生活年齢に沿った発達をとげています。しかし、彼らの言語活動をはじめとする行動面の特異さ故に、つい周囲の人々に仲々正しい認識をもってもらえないのが現状です。

こんなことを言っている私も彼らに対して正当な理解を示しているとはとても思えませんが、今までに接してきた子ども達から教えられたことをいくつか述べて、皆さんの御批判を仰ぎたいと思っています。ここでは思春期に入って自閉症児はどのような心理的変化が起こってくるのかを具体的な事例をまじえて述べてみましょう。

二、具体的な事例

事例一　M君　現在中学二年（特殊学級）

十三歳の時に初めて会ったのですが、その時の主訴は根気が無い、学校でうまく適応出来ず、異性に対する問題行動が起こっているとのことでした。女性の更衣室を覗いたり、不意に女性に接近したり、廊下でわざと足を出して転ばせたりして盛んに女性に接近するというのです。中学まで普通学級に通っているのですが、やはり学習面の遅れと対人関係の困難さが認められました。次第に孤立してきたのですが、前思春期に入って性的関心の高まりがどうしようもないほどに強まってきたのでしょう。状況判断が困難ですので、極めて直接的な形で自分の好奇心を表現してしまうのです。

こうした行動は周囲の人々の許容度にもよりますが、最も受け入れ困難な行動の一つです。そのためその行動修正は困難を極め、結局特殊学級に移ることになり

ました。性的衝動性の高まりはこの年齢では当然の現象ですので、薬物で抑制するといったことは非常に困難ですし、又人道的にも問題があります。

しかし、本人は自分の行動の結果が予想していたこととは別な反応を認め、それがもとで益々情緒的に混乱していくという状況はよく見られます。そうした時は薬物療法も対症療法として効果が少しは期待が出来ます。

しかし、こうした例はさほど多くはありません。この例で特に気になったのは、母親と子どもとの関係でした。母子関係が密着しすぎているのです。母親はこの子にべったりで過剰と思える接近をとっているのです。父親は単身赴任で長期間母子のみの生活状況でした。ある日面接の中で母親の語った言語は非常に印象的でした。「この子が私に近づいてくると嬉しいのですが、でも身体は私より大きくなっていて気持ち悪いような気もします。」この母親の心の中には明らかに息子に対してある種の性的な不安を懐いています。恐らく子どもの方にも同様な性的な意味合いを含んだ心的緊張を懐いているに違い有りません。こうした関係は専門的にはアンビバレンスといい、好きと嫌いといった相反する感情が同時に起こり、情緒的に混乱を引き起こしやすい状況なのです。子どもは身体が大きくなったとはいえ、まだまだ幼稚な部分を沢山引きずっていますし、自閉症児の場合ならなおさらです。まだまだ子供だと思いたくなるのも当然といえば当然です。しかし、一方では思春期の兆しが明らかに認められるのです。こうした時の親の戸惑いは非常に大きいものです。少しずつ気持ちの切り換えが必要になっていきます。そうした時にこの例でおおきな存在は父親です。母子関係からの両者の成長の鍵を握っているのです。

事例2　K君　現在養護学校高等部二年在学中

二歳の時に自閉症の診断を受けています。

具体的に相談を受けたのは中学生になってからでした。母子共に分離不安のとても強い二人でした。中学生になってからも母親の監視は強く、ある日自慰行為を寝室で発見されて以来、「触ったらいけません」と自らに言い聞かせながら自慰行為をするようになってしま

いました。またTVのニュース番組で今はやりの女性キャスターが登場すると決まって聞いていたのですが、この頃は男性キャスターが話す時は普通に聞いているのに、女性キャスターが話し始めると途端に音量を小さくして聞こえないようにするのです。どうも自分の心の中に起こった女性、異性への関心、性への関心と高まりを極力抑圧しようとしているかのようでした。

こうした背景には母親の強い監視の元で、自慰にまつわる罪悪感が存在し、異性への関心までも罪悪視するまでに至ったのではないかと想像するのです。そうすると母親面接の中で、この子の生まれた時からの親のある種の罪悪感が語られました。つまり母親自身の中にも別の罪悪感が存在していたのです。こうした気持ちの処理が今まで充分になされていないままだったので、母子関係の中にも緊張関係がかもしだされやすい状況になっていたのではないかと推測されました。

事例3　T君　現在在宅中

昨年の春まで某短期大学に在学していた人です。言葉がはっきり発音出来ないので訓練をしてほしいとの希望で、障害福祉センターを受診し、そこでお会いした人です。四歳の時大学病院で自閉症と診断されています。主訴は言葉の問題でしたが、大学からの情報でいろいろなことが分かってきました。大学の中では様々な問題行動が起こっていたのです。異性に対する様々な問題行動でした。女性に意図的に接触しようとしたり、威圧的行動を取ったり、歩行中の女性に突然足をかけるというのです。大学中で問題になっていました。結局は大学を追い出されるような形になってしまったようですが、診察場面では極めて従順で、恥じらいをみせ、とてもそんなことは想像出来ません。今でもエレベーターに乗るのが大好きで、診察が終わると一目散にエレベーターの方に走っていくほどです。心理検査では、やはり性に対する抑圧が非常に強いことが推測されました。

この例は幼児期に接したことがあったので昔のカルテを見てみたのですが、父親は人前にでるのが苦手で母親一人でこの子のために頑張ってきたのでした。いつも母親はこの子に「自分が嫌なことは絶対人にする

な」と教えてきたのです。そのためもあって、母親の言うことは忠実に守り、典型的な「イエスマン」になっていました。大学生になってからもヌード写真を人に見せられると、「こんな本みたらいかん」と言っては顔を背けます。セーラー服姿の女性と道で接すると顔を赤く染めて下を俯いてしまいます。それほどまでに性に対する不安が強まっていたのです。母親と離れて学校現場でこうした問題行動が起こってきたことはあながちおかしくはないように思います。余りにも彼には母親との間で拘束感が強すぎたのではないでしょうか。

三、自閉症と思春期

思春期の正常発達において、小学校高学年にもなると男の子は母親の物理的接近に対して身体の緊張や心理的不快などを感じる結果、母親の接近に反発したり、不機嫌になり、距離を持とうとするようになります。それは自らの中に性に対する関心と不安が併存し、そうした不安が母親との間で癒されるよりも逆に高まってしまうからです。そのため一般にはこうした不安は同性仲間の間で卑猥な言葉を言い合ったりしながら、癒されていきます。母親にとってはこうした男の子の心理の理解は困難な場合が多く、自閉症児を持つ母親にとってはなおさら不可解なことかも知れません。しかし、3例で示されたように、自閉症児も思春期に入っていくと、否応無しに性的な関心が生まれますし、衝動性が亢進してくるものです。このところが自閉症児の精神発達の理解の困難さでしょう。余りにも他の側面とのアンバランスが目立つからです。その結果さまざまな誤解や不適応が生じやすいのです。ここで私が強調したいのは、母親の今までの苦労と努力を過少評価するといったものではありません。そうではなく、今までの親の努力が自閉症児の将来に実を結ぶようにするには、母子ともども変化していかなくてはいけないということです。そのためには小学校高学年にもなると、以上述べたような変化が子どもの側に起こってきているということを認識し、子どもには少しでも同世代の子どもとの接触の機会を持たせたり、父親との接触を増やすなりして工夫をしていただきたいのです。

No 14

昨年、こうした子どもを持つ母親ばかり集まっていただき、「家族教室」を開きました。自閉症キャンプでも同様な試みを毎年やっていますが、これから益々こうした試みが大切になってくるのではないかと思っています。

追伸　私事で恐縮ですが、今年の春、それまでずっと勤務していました福岡大学を去り、大分大学教育学部に転勤し、養護学校教員になる学生の指導を行っています。現在は大分と福岡を往復しながら臨床活動を福岡でも継続しています。いままでも山口の方には大変御世話になりましたが、今後ともよろしくお願い申し上げます。

「うんどうかい」　●藤　文●